

令和3年度 第2回豊田市市民活動促進委員会記録

日 時	令和3年8月6日（金） 午後6時30分～午後8時15分
場 所	とよた市民活動センター ホール
出席者	<ul style="list-style-type: none"> ●委員（敬称略、会長・副会長以外50音順） 谷口功（会長）、伊東浄江（副会長）、有我都、大地裕介、鬼木利瑛、田中茂樹、長谷川和哉、三島知斗世、三ツ石靖子 以上9名 ●事務局 生涯活躍部 ：南副部長 市民活躍支援課 ：小澤課長 とよた市民活動センター：近藤所長、加藤担当長、勝川主事 地域支援課 ：近藤主査
傍聴者	なし
欠席者	小野健委員、西村新委員、三田博司委員、宮田奈佑委員

1 開会

- (1) 開会のあいさつ（近藤所長）
- (2) 副部長あいさつ（南副部長）

2 議事

- (1) 第3期豊田市市民活動促進計画の進捗状況について

事務局から、第3期豊田市市民活動促進計画の進捗状況について資料1-1、1-2に基づいて説明し内容についてご意見いただきました。

A 委員 各事業の進捗評価について、担当課が報告した評価を、事務局が確認し齟齬はないとした評価が資料に示されています。皆さんご意見があればお願いします。

事務局 コロナ禍で他の自治体は市民活動が低迷している中で、「1-2 誰もが市民活動に参加できる機会の提供」は令和元年度が80%であるのに対し令和2年度は90%に上がっている。何か理由があるのか。資料1-2の2ページ目「市民活動見学・体験事業」について、令和元年度は未実施のため評価Eだったが、令和2年度では「つながる博」を新たに開催したため、評価Bとし、全10事業のうち9事業が評価B以上のため、90%となった。

B 委員 市の事業になかなか関わることがないが、色々な視点で取組をされていると感じる。

C 委員 人数・件数の記述があるが、この結果が多いものなのか少ないものなのかがわからない。評価が進捗評価なので、効果・成果がわかりにくい。

A 委員 評価については、量的な評価と質的な評価がある。質的な評価を各

担当課がどのように評価するのは、なかなか数値だけで表せることではない。資料に載せるかは別として担当の職員が言葉できちんと説明できることが大切。全体的に活動量が下がっている中で、第4期計画ではどのように計画を評価していくのかは重要である。

(2) 第4期豊田市市民活動促進計画の施策体系(案)について

事務局から、第4期豊田市市民活動促進計画の施策体系(案)について資料2に基づいて説明し、内容についての意見をいただきました。

D 委員 交流館の機能強化は言われ続けているが、具体的にどこを強化するのかというのは難しい。しかし計画の文言としては、ふんわりとした表現になると思うので、めざす姿・基本方針はいいと思う。

E 委員 めざす姿で「自立」という言葉から「楽しむ」という言葉に変わったが、「楽しむ」でおわってしまっているのか。「楽しむ」の中にチャレンジするというニュアンスが入るといいと思う。チャレンジは社会課題をきちんと拾うということでもあり、オンラインなど新しい手法を取り入るということでもある。

また、重点取組で「市民活動支援拠点の機能強化」とあるが、「共働連携のコーディネート機能を強化する」というように具体的にわかりやすい表現にするのはどうか。市民活動支援拠点の機能強化は何のための支援なのかを考えると、深刻化する社会課題を解決するためであると思う。そのためには共働連携が重要になると思う。

もう一つ、コロナの時代で実行する計画なので、大勢の人を集めるイベント形式以外のやり方を4年間で試してみることが大切だと思う。ステークホルダーに参加してもらい、イベントのターゲットを話し合い、情報を集め、新しい手法でやってみる、という仕組みをきちんと回してみる。今期の計画では今までとはやり方や考え方が変わっていくということを意識したい。

F 委員 テーマの中に「楽しむ」という言葉が2回出てきているので別の表現にするのはどうか。市民活動の入り口は楽しい・関心があるというものになると思うが、その中で団体や個人が気付いた課題をどう拾い、活動につなぐことができるのかが大事になる。

A 委員 お祭りやイベントをして楽しいということで終わらないもう一歩先の市民活動を表現できるといい。NPO法が設立して20年たち、市民活動がなんでもありになりつつある。社会の課題に対してどう解決していくのか、市民活動のミッションに向かってどう進めていくのかを再確認できるといい。

G 委員 めざす姿に「いきいき」という言葉を使うのはどうか。市民活動をすることは、社会課題や人のためでもあるけれど、自分がいきいき生きることでもあり、生きる価値にもなる。市民活動をして社会課題を解決すると「ありがとう」という感謝が広がる。ありがとうが

つながる、ありがとうが広がるまちという特徴を表現してみるのもいいと思う。

また、市民活動に参加したいというきっかけを作るためには、社会課題を発見・設定する力が大事ではないかと思う。基本施策に「社会課題に気づく場の提供」というのがあるが具体的にどんなことをしていくのかを知りたい。それから、前回話に出ている営利・非営利問題はどうなったのか気になっている。もう一点、市民活動団体を継続・発展させるための支援に講座を開催するとあるが、マネジメント能力の向上運営管理などハード面だけではなく、物事を進める際にはコミュニケーション力が大切だと思う。ソフト面も取り入れた講座があるといい。

A 委員 市民活動をすることがどう生きる価値につながるのかうまく表現できるといい。尊厳のある生き方、尊厳をもってという言葉が個人的にはいいと思う。

単にお祭りではなく、課題に寄り添う社会を豊田市が目指す。豊田市は企業社会を抱えながらこういう市民社会を作ろうとしているということの世界を意識しながら描けるといい。

また、営利・非営利問題は避けては通れない話。私は市民活動は何のためにするのかというミッションをきちんと優先する活動であると思っている。活動の本質がぶれなければいいと思う。団体のミッションの描き方・見せ方を丁寧に見ていきたい。

G 委員 大学生がボードゲームを開発し、子どもたちに体験の場を設けるといいう事業をやっている。今は名古屋でやっているが今度豊田でもやりたいという相談があった。しかし、参加費を集めることを施設の職員に伝えると営利目的とみなされ、公共施設に利用を断られてしまった。社会課題を解決する活動ではあるが、豊田に壁を感じられてしまっている。

A 委員 中間支援が活動のコンセプト・本質を見極める技量が必要である。
H 委員 営利・非営利に関しては、もっとおおらかに考えてもいいのでは。おいでんさんそんセンターは地域の社会課題を解決するためには営利も支援していかなくてはいけない。非営利との線引きは難しいが、一度踏み出してみてもいいと思う。市民の活動も非常に多岐にわたっている。いろんな捉え方を見直す時期にきていると思う。
また、「楽しむ」は軽い感じという意見もあるが、すそ野を拡大するためには入りやすい方がいいのではないかと思う。自分が好きなことでないと始めないし、続かない。市民に受け止められやすい計画になるといい。

A 委員 公益的・公共的な課題というのは、市民活動でぶれてはいけないところだと思う。公共的な課題に関しては、豊田は共に働くという「共働」がいきていると思う。社会課題の解決は行政だけの問題ではな

く、市民にとっての問題である。もう一度共働を問い直し行政がやること、市民ができることを整理してもいい。

また、「新しい生活様式」という表現について、最近は少し使われなくなっている気がする。最近世界的に「ニューノーマル」という言葉も使われてきている。

C 委員 めざす姿の「楽しむ」ことは活動を継続するうえで大事だと思う。また、市民活動支援拠点は何を指しているのかわかりづらいので、補足説明があるといい(市民活動センター、ボランティアセンター、交流館など)。

基本方針は見せ方の工夫が必要だと思う。方針③の市民活動支援拠点の機能強化をすることで、方針①②を行う。もしくは、方針①②をするため、方針③の機能強化を行うと思うので、方針①②③が横並びになるのではないと思った。

取組みの主な内容にある【拡充】とは何をもって拡充なのかを、パブリックコメントの前にもう少しわかりやすく目指すところを示せるといい。

また、各ボランティアセンターと連携したボランティアマッチング機能強化【拡充】とあるが、ここはボランティアマッチングでいいのか。市民活動促進計画であるし、他の内容は市民活動と表記されているので、ボランティアマッチングではなく市民活動マッチングとしたほうが良いではないか。

B 委員 この施策体系図はざっくりまとめたものだから、指標までは入れなくてもいいのかと思う。

A 委員 「市民活動支援拠点の強化」にはそれぞれの多様な主体が高めあい、支援の拠点同士がきちんと連携しあうという意味合いも込められていると思う。中間支援は何をするのかももう一度問わなければいけない。

E 委員 育ちあう循環というのが重要であると思う。愛知県の多様な主体の連携共働の調査をしたときにコーディネーターはどこにいるのかという話になった。もちろん行政やセンターにも情報資源を持ったコーディネーターは必要だが、市民活動団体の中にもコーディネートできる人もいる。しかし今はあまり意識されていないので、顕在化させ育ちあいの仕組みが回るようになるといい。

A 委員 センターのための支援で、すそ野を拡大することに限界がきている。オンラインだからこそほかのエリアの人が参加したり、情報交換したり交流人口が増えることがある。

また、豊田市だけでなく周辺地域の環境を見ながら、計画を立てたい。三好や日進をみていると結構豊田に通っている人多い。活動者はいろんなところで生活しているのでそこを後押しできるような制度があるといい。市民活動もここだけで完結しないメッセージを

出せるとよりよくなる。

もう一つ、商工会議所はじめ、社会貢献という意識が働いている中で課題から支援につなぐ仕組みがないと厳しい状況になってしまうので、そこを巻き込んだ進んだ計画になるといい。

E 委員 センターにきてもらい相談するというだけではなく、プロボノのように団体に寄り添い、活動場所に出かけて支援するアウトリーチ型の活動も取り入れ、育ちあうという手法が言葉化されるといい。

I 委員 地域の社会課題に着目することも大切だが、まず地域の魅力を伝えたいという人が多い。地域課題だけではなく、魅力をどう伸ばし、地域がどのようによくなるかという魅力を捉えていくのもいいと思う。

また学生が活動したいときに、公共施設も利用を断るだけではなく、こういう方法もあると紹介することで一歩先に進むことになると思う。ボランティアはお金をもらわない、という認識を持っている場合もあるので、ある程度の資金を得てそれを回していく活動も大事、という助言したり、横の連携で紹介したり、解決方法は一つでなくてもいいと思う。最近は「重層的支援体制事業」という様々な立場の人の様々な力をかりながら1つのことを解決するという意識をやっている。言葉だけではなく、何が具体的な連携なのかどのようにつながったら解決するのか、具体性が出てくるといい。

また、めざす姿で「自立」という言葉を使わなくなったが、言葉の陰にあった思いをどのように出していくのか。活動が継続するために、お金だけではなく様々な面で支援があると、その団体に合う自立の方法がより具体的に見えてくると思う。

A 委員 様々な省庁が出す支援を解釈しながら、どうまちづくりにつなげていくのか、どう団体を後押しするのかその仕組みが重要になる。

F 委員 「コロナ」という言葉を使ってもいいと思う。今までとは違う形で支援する必要がある。もう少し活動団体や中間支援もオンラインを活用した交流会をやってもいいと思う。オンラインのツールを使わないとなかなかつなげられない。トライアル的にやらないといけないと思う。やってみることで、今まではつなげなかった団体さんをつながれることもある。活動を中止している団体も多いが、なんとかオンラインでつながり一生懸命やろうとしている団体もあり二極化している。事例紹介などを通して何をどうしていくのか示したい。

G 委員 循環エコシステムのような多様な主体がうまく連携し合って循環している図を作ってもいい。企業、個人、行政、団体が育ちあい、市民が喜んでいる感じを可視化できるといい。

A 委員 おいでん・さんそんセンターは育ちあいのいいモデルになる。支援

する側もされる側もともに育っている施設である。

閉会

(1) 議事録確認のお願いをしました。